

三年目

二月

○日

常務氏とK氏に寝込みを襲われた。二、三日前にK氏から行く予告があつたけれど、明日のはずであつた。今日になつたのなら、なんで言うてくれはらへんの！ K氏は、突然ですみませんと言われたが、ほんとにすまないわ。私は寝起きは悪いのデス。しかしまあ、朝起きて鍵をあけてからまた寝床にもぐりこんだ私が悪かつたのかも知れない。

ところで、用件は一、二寮を合併することである。突然で突然に、であつた。目が覚めた。

会社が地方出身者を減らす方針で、三寮がなくなるのは決まっていた。やがて一寮もここも必要なくなるだろうとは思っていたが、早かつた。

一寮を閉めて、一寮生は二寮に引っ越し。「人数が多くなりますがよろしく」との

ことである。以前、工事の時に預かったことがあるから、人数の多いのは一向に構わないけれど、寮母のHさんはどうするのか。また一緒にやってくれませんかと言われるのだったら、私は辞めさせてもらおう。彼女のいびりに耐え切れる自信はない。

先日来、Hさんから「三寮の寮母さんが辞めさせられてかわいそうや」と暗に、三人のうち一番新しい私が辞めるべきやないか、という電話が度々かかっていた。私はそういうこともあるだろうと、三寮のことが決まる前に一応、はみ出すのは私でしょうと言つてはいたが、三寮のIさんは十年勤めたから辞めると自分から言われたとのことであった。どうやらHさんは、一寮がなくなるのを予知して、Iさんにかかつて私に揺さぶりをかけてきたらしい。

確かに私は新米なんだし、Hさんと一緒はいやだから「辞めてもいい」とK氏に電話をかけた。K氏は「それは会社が決めること、勤務状態も考慮してHさんには辞めてもらう。何を言われようと気にすることは無い」と言われた。

ヤッホー。やったね！（たねにアクセント、寮生の口調を借りるところなる）あの百パーセントが効いたかしら。

石の上に三年、いや二年しか経っていないけれど、会社の上司がそばにいない代わりに、先輩のHさんがいた。彼女は「寮生にいい寮母さんと慕われるのは、実はしつ

もようせん悪い寮母や」と私を責めるのだ。私は寮生を力ずくで押しこめるより自覚を待つ方針である（最近はぐらついてはいるが）。それにHさんに雇われているのではないから、どんなにHさんの機嫌が悪かろうと、自分の考えでやって来た。

その代わり、のいびりはかなりのもので、私はノイローゼにもなった。時には寮生がとぼっちりを食い、かわいそうなこともあったが、これでもうそんなことはなくなる。やったね！（と再び）

○日

先日、常務さんが寮内を見て回られた。タイルのはがれを見て「女の子の寮だから、はんなりした色のに替えましょう」と言っておられたが、すぐに業者が見積りに来て、今日は食堂の床が半日で貼り替わった。

旧館の物干しと、枯れ木も取り払われた。これも常務さんの指図らしい。木を倒す時、二人の技師が汗をかいていたので「私は力はありませんが、体重なら貸します」と申し出たが、私の代わりに石をテコにして根はひっくり返された。

その二人が「ついでですから何か他にすることがあったら言ってください」と言っていたので「旧館をつぶしてほしいのですが」と言っていたけれど「それはまた後ほど」とつ

ぶさずに帰ってしまった。

今度、常務さんが来られたら試しに言ってみよう。

○日

夜遅く、ある銀行の寮監さんから電話がかかってきた。私が着任した直後に寮を替わったX子はいるかというのである。私がいらないと言うとそこですかと尋ねられ、なんか変な具合なので詳しく聞いてみると、銀行の寮生がX子の所に行くと言って出て帰って来ないので電話をした、ということであった。外泊先はいつもそちらになつていますが、と言われるが、ここは原則として友人は泊められないことになっている。何より当のX子はとつくにいないのであるから、でたらめを書いて、他所に泊まっているのだろう。

どことも同じで、この寮生も半分はでたらめの外泊先を書く。男友達の所に入り浸り、そこから会社に通っていることが周知の事実であっても、寮の連絡票には親戚や女友達の名前が書いてある。

いつか、ある寮生の両親から何度も「お婆あちゃんが死にそう」と電話があつて、所在が判らず困ったことがあつた。親に私が責められている雰囲気もあつたが、とい

て私生活に深くは入りこめないし、頭の痛い問題である。

○日

最近、ゴム手袋を愛用している。ゴム手袋はもどかしくてきらいだったけれど、怪我をした時、どうしても使わなければならなかったので使った。でもやはりすぐ脱ぎにくくなる。

従妹が手術用の手袋がいいと言うので試してみたら、これはよかった。中に薄い木綿の手袋をして上にゴム手袋をはめるのである。だぶつかないし、感触は素手に近い。料理をする時には使わないが、掃除洗濯には重宝している。手の荒れがうんと違う。買う所は薬局さん。

○日

だらけた寮生にカツを入れるために寮会を開く。こここのところ規則を無視しがち、後始末も悪い。これ以上の辛抱は私の体に良くないのだ。

予め言いたいことをメモしておいたが、約三十項目もあった。こんなつまらんことまで言わんならんのかと、いやいや言っていると声のトーンが落ちてくる。我ながら

“いやなおばさん”の感じだ。言いたくないのよ、ほんとうに。

いろんなことを言ったあとで「私のやっっているように、というのには程度が低過ぎるけど、せめて私ほどに、それ以上にやっってもらえば文句の言いがいもあるのよ」と、したたかなテキの「えらそうに言っつて、おばさんも怠けてる」と反撃に出るかも知れないのを予防したあたり、年の功か。

しかし、あとで寮生の反省の言葉があつて「おばさんの注意された（あの）ことをしていたのは私です。これからはしませんから」とか「たしかに甘えてルーズになっていました。叱られてからキチンとするのでは情けないから、自分で気をつけます」とかいろいろ言っつてくれた。いづれそう言っつたことも忘れ果てるかも知れないが、しばらくはもつだろう。（甘いかな？　しもた、録音したらよかつた）

まあ今夜のところは信用することにして「私はもう残り時間が少ないのだから、怒つた顔で過ごしたくないの。ニコニコしていたいから協力してね」と結んでお開きにした。一時間半もかかつていた。

今日から私の寮母生活は三年目に入る。

三月

○日

新入社員へのお祝いと歓迎を兼ねて、今日は全員特別食。去年はRさんに手伝ってもらった。今年は数が少ないし、甘えるのはやめておこう。私から電話はしない、と決めた。向こうからかかってくる分には、この限りにあらず。心の中でRさんに連絡してよと念じる。

私の念力は素晴らしくて、Rさんから電話がかかった。待つてました！私「飛んで火にいるなんてかて知ってる？」Rさんは気の毒に、そんな日と知らず声をかけたばかりに、かり出される羽目となった。

彼女の顔が見えたらキヤツキヤツと言つて抱きつきたい感じ。憎たらしいこと言わないで、素直に手伝つてと言えばよかった。楽しくやつて三時間で完了。感謝多謝。

Rさんは優しいけれど怖い人でもある。私がかよくよしていると叱る。考え方を変

えるように厳しい顔で言う。私は彼女にあいそをつかさねるのはいやだから、素直に言うことを聞いて立ち直るのである。

しかし彼女が洋服を縫いに来ていたら、私が「こんな縫い方あかん、やり直し」なんて言うもんだから、Rさんは娘のAちゃんに「手を抜いたら武田さんに怒られるんだよ」と言っているらしい。

二人は三十年以上も前のコーラスの仲間で、特別にいろいろと縁が深く、私が池田に来たら、一足先に住んでいて、これはもうべつたりとつき合うように、初めから決まっていた気がする。彼女は私を、お嬢さん育ちやから何も知らん、ほっとかれへん、と思ひ、私はあの人は私のように苦労していなく、世間の垢のついていないマシユマ口のような人、会っていて気持ちがいのはそのせい、と思っている。

すなわち私達は「美しき誤解」を合っているのかも知れないけれど、不都合はなく、助けたり、助けられたり（の方が多いいけれど）している。このあとまたお世話になるから、会ったことのあるU子の言葉を借りてゴマをすっておこう。「あの優しそうな上品な奥さん、私もあんな奥さんになりたい」。

今年の新入生は一人であった。短大卒だが、母親が寮を下見に荷物と一緒に来て、かなり過保護のように見える。「朝起きられるか、それが一番心配です」と母親。私は「大丈夫ですよ、頼る人がいなくなれば必ず目が覚めます」と言ったが「そうでしょうか」とまだ心配そう。「だめなら私が行ってけりますから」と言ったら目をむいた。「私の可愛い娘をけらんといて」というところか。私はほんとにけりはしないし、寝過ぎて遅刻してもいいではないか。何でも一人で経験すればよいのだから。

毎年、新入生が研修の間は朝食を作っていたが、今年はやめることにした。一人だけだし、大卒だし、どうやら食事の用意もしたことがなさそうだから本人のためにもならない。来た日に「朝食は作らないから、自分の好きなものを調理して食べてください」と言い渡した。「それじゃパンやミルクを買ってこなくちゃ」と母子二人で買い出しに出かけたが、去年の父恋しの娘のように、旬日を待たずに逃げ出さねばよいが。

○日

電話のベルが何回も鳴る。私は夜の電話番号はしないことになっているのに誰も出ない。最近私ばかりだ。我慢くらべだと私が負ける。ブツブツ言いながらも仕方なく出

たらもう一つの方も鳴り出した。それもとって、二人一度に呼び出しをかける。二人がすぐ駆け下りてきたが、私は意地悪をしてやった。二人が「どっちが私？」と聞いたけれど「さあ、どっちでしょうね」と言つてやったのだ。ボーイフレンド達、すみませんねえ、もうちよつと待つてやつてね。

Y子が「かなんなあ」とO子と顔を見合わせている。私はニヤニヤ笑つている。いやその前はプンプンだったのだ。あんなに早く下りて来られるのなら出なさいよ。そのうちおばさんが出てくれるやろというのはなめ過ぎです。

O子が「私こつち聞いてみる」と言つて受話器をとつたのが当たつていた。逆だったら面白かつたのに。知らん顔して反対を示してやつたらよかつた。意地悪の仕方が足らんかつたわ。

○日

最近、食い気色気返上して、専ら縫い気に浸りこんでいる。人のや自分の、新調更生など数々。

縫い物をしてイカレるところは目や肩と相場が決まつているが、私は膝がイカレる。原因はきちんと座つてするからだ。普段はお行儀よくないくせに、縫い物となる

とどういうわけか、くずしてもまたいつの間にか正座をしている。

痛くなりだしても座り直せる間はまだよいわけで、でもそれができなくなってもまだ縫いたい時は、ヨガのポーズに似た格好（あぐらともいう）でやったり。何もそんなにしてまで、と思わぬでもないけれど、そこがその気づいている所以である。

しかし、ようやく飽きがきて、今度は読み気に移りそうな気配。

運動不足解消に五月山に登ったら、膝は何ともなくて、足の甲が痛くなった。私の体もかなりの天の邪鬼のようだ。

○日

消防署の立ち入り検査があった。二人の消防士の、誘導灯が点灯しているか、停電しても予備灯がつくか、防火扉がちゃんと閉まるか、その他避難はしご、消火器、火災報知器、出火の場所を示す通電試験など、かなりの数の検査であった。

進むにしたがつて×印が増える。報知器の位置を示す赤ランプが一つ消えていたのを、私は「それならあります」と、今まで何に使う豆球かと思っていたのを取りに戻り、つけ替えて×印を一つ減らした。

あとから結果表が届くので、それに基づいて不備を改善し、報告書を消防署に出す

ことになった。

防火扉にはアジャスターというものがついていて、これはかしい。各階の部屋部分を遮断する扉は手でも閉められるが、火事になればその熱でヒューズがとんで、ひとりで動くようになっていて、扉の形は観音開きで左の上に右がかぶさって隙間ができない構造だけれど、たとえ右が先に動いても、左が閉まるまで途中で待っている装置がついている。左がおさまればすぐ上にかぶさる。ほんとうに、待つてたよ、という感じである。

実は、それがうまく作動しなくて叱られた。いくら、かしい装置であっても、付け方が悪けりや宝の持ちぐされである。今までの検査はどうなっていたのだろう。

電気部のM氏が来て、彼も知らなくて「ほう、こういうことになってましたんか」と言いながら調整をし、ようやく動くようになった。私はこれが実際に作動することのないのを願いながら、何回もやって遊んだ。そんなに複雑なものではないけれど、よくできている。その都度感心する。

○日

消防署立ち入り検査のあと偶然に、避難はしごの点検に来たので、早速、指摘され

たはしこの取り付け場所の表示板をつけてもらった。そしていつものように、実際に三階から庭へ垂らして降りてみたが、袋の中を降りながら気がついた。

半年毎に、私とその日休みの寮生が訓練をするのだけれど、私ではなく、三階に住む寮生に、取り付けができれば何にもならない。階段を使えない時に、はしごを下ろすことになるのだから、一階にいる私が取り付けに行けるくらいなら、上からも降りて来られるわけである。はしごはいらない。こんなことを今頃になって気がつくなんて。四月から人数が増えることだし、三階の全員に特訓をしなければならぬ。もう一つ気になることがある。外部から痴漢などが侵入しないように、窓ガラスには金網が入っているし、塀は高く、あちこちに有刺鉄線が張つてある。入れないということは出られないのもあった。防犯をしっかりとすればほどに諸刃の剣である。これの解決法は見つからない。

四月

○日

最近の雨は「春雨」「菜種梅雨」と、いい名前をもらって、遠慮なしによく降る。

B子とM子が「明日降るのはわかっているのだけど、一応用意しておくの」、と夜遅くお弁当を作っていた。高校野球を見に行くらしい。色とりどりの、豪華なお弁当であった。

しかし野球はやはり雨のため順延となる。朝一度起きてまた寝たらしい二人は、お昼頃につまらなさそうな顔でお弁当を食べていた。彼女達の休みは順延とはならない。

大雨が降っていても、寮生達はいつもの靴を履いて行く。大阪市内に入れば、雨の道歩くことは少ないが、寮から石橋までは一キロほど吹きさらしの道を歩かねばならない。瞬く間に濡れるのに、みんなお構いなしだ。気が知れない。

夕方から私はバスタオルで作ったマットを上がり口に敷いておく。そうしないと、

濡れた足跡だらけになるのだから。みんなは帰って来ると「わあ、足ぼとぼと」と大騒ぎをするが、ぼとぼとになるのを承知で、短い靴を履いて出るんじゃないの。

その後がまた大変。靴を乾かすために、靴箱の上にはずらりと並べてある。乾いてもそのまま置いてあるのが必ずあって、私は「放つたらかしにしてある靴は捨ててもいいのね」とわめいている。雨が降れば、このパターンが間違ひなく繰り返されることになる。

U子が一人だけ長靴を履いて行く。その長靴は赤くて、雨の空によく似合って、私が出歩ける身であれば、きつと真似をして買っているに違ひない。

○日

例の過保護の新入生が、まさかと思っていたのに、ほんとうに家に帰ってしまった。

一週間経った頃に、彼女は大学の卒業式があるからと二、三日研修を休んだ。再び寮に帰った時、私は「里、心がついて、もう寮に帰りたくなくなっただんじやない？」と冗談のつもりで言ったら「はい、配属が営業センターに決まれば、家から通えますから帰ります」と言った。私の言葉は渡りに舟、みたいなことになった。

家は兵庫県三木市のあたりである。営業センターは、本社より西寄りではあるが、

直営店にしても、そう変りはない。まあどちらにしろ通えないことはないけれど、寮に入るのは時間のロスをなくすという理由であった。

人事部のA氏から「お騒がせしまして」と電話がかかったので「初めからお母さんがべつたりでしたから」と言うとお父さんが淋しがって呼び戻されたらしいですよ」と言われた。私は「えへっ、またお父さんですか」と言っていました。お父さん、ちよつと女々しくはないですか、娘が結婚した時はどうなさるおつもりですか、また、出戻りの娘になさるのか、まさか、ずっと側に置いときたいというのじゃないでしょうね、と言いたくなる。

同室になったO子は、先輩のルームメイトとしてと思ったのだろう、テレビを買った。しかしそれを二人で観たのはほんの数日である。気もお金も使って、その相手にさつといなくなられては、たたらを踏むようなものだ。私も何か忌避されたような感じもあって、気分はよくない。

母親が迎えに来る予定の時間に、私は他の寮生に留守番を頼んで外出した。笑顔を作つてどうぞどうぞとは言えない。それどころか、一言言いそうである。言つたところでばからしいし、顔を見せないことが、せめてもの意思表示だと、失礼でも何でもよい、職場放棄を敢行した。彼女の帰つたのを、ほとんどの寮生はあとで知った。彼

女が寮にいたのは正味九日であった。

○日

先日来何度も、それまできちんと電話をかけて食数を聞いてくれていた給食センターの人が、言ったのにまたかけてきたりして、おかしいなと思っていたら別の人に代わってしまった。二年余りの間にただ一度別の声を聞いただけであった。いつも愛想のよい丁寧な口調のその人を、私は声だけで顔や背格好を想像して、あの人も元氣によく働くなあ、と親しみを感じるようになっていた。

病気なら早くよくなって復歸してほしい。いつの間にかその電話が、私の仕事の始まりを告げるベルになっていたようで、もちろん人が代わってベルは鳴るけれども、何か調子がよくないのである。それと間違いが多い。伝票と品物の数が合っていないかったり、一寮のとごっちゃにしたり。これはその人が休んだからではなく、偶然が重なったのかも知れないが、私は毎日落ち着かない。

数の足りない日が続いて、先方は申しわけありません、気をつけます、と謝ってはいるが、その後のこちらのやりくりを知っているのかしら。二人分足りない時、一人は私が欠食するとして、あと一人探さなければならぬ。遅番で帰る子はかわいそう

だから、早く帰りそうな子に謝って欠食にしてもらう。五目煮の日も二人分足りなかったけれど、予備の野菜を足して増やし、私以外の欠食はもう探さなかった。しかし、寮費の計算上では、誰かを欠食にしなければ合わなくなる。

給食センターから来る納品伝票も、マイナスの伝票が入り混じってややこしい。あの人が帰ってくれば正常に戻るような気がする。朝、ベルが鳴れば、あの懐かしい声でありますように、と思つて受話器をとる。しかし、今日もまた別の声であつた。

○日

運動不足解消と思つて、お布団の上で柔軟体操をして首をいためた。全くアホな話。外出できないところ、治療のため、という名目で毎日出かける。これも皮肉な話。毎日出歩けるのなら、体操をしないで首をいためることもなかった、ということになるのだから。

病院のリハビリ室に通つて、牽引をしてもらっているが、前に鏡があれば面白いだろう。引つ張る時に、ベルトが顔に食いこんで「ひよつとこ」の顔。戻れば自前の顔で、二十秒毎に「おかめ」と「ひよつとこ」の二面相の繰り返しをやっているのだった。

斜め向かいでやっているおばあさんと目が合った。おばあさんが笑つた。同じこと

を思っているのだろう。いやそれとも自分のは見えないから、私の顔が面白くて笑ったのかしら。いえいえあなたもかなりのもんですよ。私も笑った。そして一人で思い出し笑いならぬ、想像笑いを続ける。

しかし、病院で楽しんではいけけない。来るべきでもない。私に病院は似合わないわ。でも年は、いわゆるトシなんだし、現に、重い物をどうかしてなった、というのならともかく、体操をして故障するのだから、似合わないなどと言うのは思いうがりだろうか。

○日

私鉄スト前夜はてんやわんやである。中止になる可能性があっても、一応きちんと出社できる対策を立てておかなければならない。

会社から迎えの車が来て、石橋、千里中央間をピストン輸送となるが、二便以後は道の状態によるから時間が決められず、みんな一便に乗りたい。しかし、定員八人のため一寮とも相談して、どうしても早く行かなければという八人にしぼる。そこへ寮以外の石橋、池田に住む人から、乗せて、と言って来る。電話機片手に黒板の名前を書いたり消したりかなりややこしい。

ようやく三便までの割り振りを終えて寝るけれど、スト中止になれば、全くの空騒ぎとなり果てる。私鉄がストをかまえるのが年中行事なら、こちらもこれは年中行事である。

○日

寮族大移動。今日は一寮生の引越しの日である。大移動とは言えないほどの七人がやって来るのに、その荷物たるやすさまじい。引越しは不要品処分のチャンスよ、と言つてあつたから、少しは減らしたかと思うけれど、トラックが二台で十往復もした。

新入時は布団袋一つであつた。人が暮らすのに、何もなしでいけるし、品物の種類と数がどれだけ増えてもみんな必要なものという、この不思議さを思いながら私は荷物の山を眺めた。

表札は好きに書く、と言うから紙を渡したが、なるほど好きに書いてある。「早苗ちゃん」はいいとして「ちりりん」「いね・まん」「かずお君」なんのこつちゃ。「いね・まん」はW子。姓名に関連はないので、どうしてと尋ねたら、先輩はいねさんと呼び、同輩はまんちゃんと呼ぶからだ。どうしてそう呼ばれるのかと聞けば、知らんけど、

という答である。

同室の「みなりん」によれば「まん」はウルトラマンのマンであろうとのことであった。了解。古典的に言つて「金太郎」そのもの、強そうである。

そのまんちゃんはじめ、全員動きが大きくて、騒々しいと言えなくもないが、これまでの陰湿気味の二寮生には活が入っていいだろう。私もシーンと静まり返っているよりは、むしろドタバタと音がしている方が好きである。今日から二寮は二十二人の世帯主の住み家となった。

○日

顔合わせ寮会。自己紹介から始まったが、みんな年のことが気になるようである。「もう△歳です」と、やけくそ半分のや「まだ×歳です」と、うれしそうに言うのがいる。まあ巷の結婚適齢期というのが△と×の間にあるらしいのだが、どちらも私の子供よりは下、可愛らしいものである。

寮長、副寮長を決めてから、規則の確認をしたり、その他いろいろ言っているうちに、元一寮生が、前はこうだった、と寮母さんを非難する口調で言いだしたので、私は「前のおばさんがよかったとか悪かったというのは一切聞きたくない。私は私のや

り方でやるから。こうした方がいいのでは、というのはいくく」とさえぎった。

それから「寮生みんなが仲良く暮らすのにこしたことはないけれど、考え方が違って当たり前なんだから、辛抱してストレスをためるよりは、けんかをした方がいい」と言っておいた。

はじめは年長者が入ってやりにくいかと思っただけで、二寮生が先輩を迎えて少し気を引き締めたところがあり、かえってよくなった。また私にかなりの重圧をかけた寮母さんがいなくなったのも幸いである。改めて自分の路線を引き直し、初心に戻って、私も再出発だと思っている。

五月をパスして六月

○日

怠けぐせがついた。炊事の他は大幅に手を抜いて、クッションにもたれて本を読むのがお決まりのポーズとなつてしまつている。動くのは、時々整骨に行くのと、図書館に本を交換に走るだけ、寮内見廻りもせず、寮生と積極的に話をしない。

一つだけ目立つことをしたのは草取り。これはどくだみの採集が主目的で、雑草はついでにとれてしまった。どくだみは干して煎じて飲もうという魂胆。ところが、雑草を選び分け、洗つて少しづつ束にしてみたら、ざつと数えても五百本は確実にあつた。

適当な干し場がなくて、今は物置の中にぶら下げてある。頭痛を誘ういやな匂いは抜けて、いい香りがしてきたが、なお頭は悩ませられる。この後の処置やいかに。

○日

最近二回も独り言を人に聞かれてしまった。

回覧板が夕方に回って来たので、お風呂の用意が済んだ夜になってから返しに行つたが、うろ覚えの上、暗くてよく判らない。「理事さんの家はここだと思うけど」と独り言を言ったら「そうですよ」と人の声。ぎよつとして振り向いたら、そこのご主人が立っておられた。

前の晩、寮に入りたそうに鳴いていた子猫を、ママの所にお帰りと旧館の庭に戻した。人間の匂いがついたら親猫の気が悪かろうと、手袋をはめて運んでやったのに、朝、門を開けに行ったらまた鳴いて寄って来た。「あんたまだいるの、ママが見つからへんかったん」と言っていたら、向かいの奥さんが塀の横から現れて「親猫が一匹ずつくわえて何回も運んでいたんですけどねえ」と言われたのでびっくりした。家の外から花の手入れをしておられたらしい。改めて朝の挨拶を交わし、猫は子供の数が判るのかどうかという話をした。

結局子猫は私について歩くので旧館の庭まで誘導し、まいて帰った。親猫の計算能力を信じることにする。

夜は窓ガラスの向こう側にへばりついているヤモリをけしかけている。すぐそばに

蛾がとまっているのに、首を反対側にねじったまま動かない。「ほら、こつちでしょ、とろくさいねえもう」カーテンを引いてしまうと、ヤモリの狩獵に差し支えるからずつとあけてある。寝る時に「私は寝るからあんたももう寝なさい」と言つてカーテンを引く。この独り言は誰にも聞かれていないはずである。

○日

夜中、部屋の戸を叩く音で目が覚めた。M子が「Aさんの具合が悪そうだから見てください」と言う。A子は青い顔をして海老のような形で寝ていた。とぎれとぎれに言うのを聞けば「お腹が痛くなったのでトイレに行こうとしたのは覚えているけれど、気がついたら廊下で寝ていた」とのこと。そしてお腹はましになつて、今は頭が痛いと言う。

倒れた時に頭を打つたのかも知れない。調べたら側頭部にこぶができていた。とりあえず冷水で冷やした。吐き気がしたら救急車を呼ぼうと、すぐ出られる準備をする。しかし、痛みは和らぎ、顔色もよくなつてきたのでほつとした。念のためもう少し見守り、眠れるというので私も眠ることにする。空が白くなりかけていた。

翌日は日曜日なので安静に過ごし、月曜日にレントゲン写真と脳波をとつたが異常

なしとのこと、ようやく安心することができた。しかしどんな倒れ方をしたのだから、足にもひどい内出血があった。

○日

徳永さんの、ご自称「ヒッピー旅行」に同行させていただいた。はじめは、三田市永沢寺のあやめを賞でる予定だったが、私が夜中まで外出していたと言ったからか、急に湯村温泉行きとなった。

しかし私は湯村温泉がどのへんにあるのか、テレビも映画も観ないから夢千代の温泉町ということも知らなかった。三田のちよつと奥の方かと思いつながら地図を見たが、天眼鏡の枠の中に湯村の字はなかなか入って来ない。ようやく見つけた時には、鳥取と日本海も一緒におさまっていた。

「エーツ ウツソー ホントー」という思いである。大まかに計っても百五十キロあるではないか。徳永さんに、酔う人かと聞かれた時、酔わないと答えただけれど、全く自信がなくなつた。でもそんなこと言つて連れてもらわれないと困るから黙つていいことにする。酔わない、と暗示をかけよう。

徳永氏に「あんなに遠い所だとは知りませんでした、もう鳥取に近いですね」と言つ

たら「鳥取に出て砂丘に寄りましょか」といともあつさり言つてのけられた。お二人は普段「悠揚迫らざる」という感じだけれど、車に乗れば急変し、どこまでも突つ走ろうという、もはや上体が前に傾いているふうに見える。足腰のしつかりしたランドクルーザーがぴつたりで、そこらへんのやわなドライバーとはえらい違い。

助手席の特等席に座り、お二人のいつもの横一フオーメーションを崩して申しわけないけれど、ご好意に甘えさせてもらった。

全行程のいろんなことは簡単には書けない。人の心の優しさと温泉につかり、海山の景色、花や鳥、螢の飛び交うのを見るおまけもついて、私の感想は、宝の山にもぐりこんでいた、というのに尽きる。そしてあれがたった一日の出来事だったのかと不思議な気がする。車に酔っている暇もあらばこそ、疲れはなくて体調はかえつてよくなった。私が運ばれた距離は四百三十キロであった。明日から怠けずに働く。

七月

○日

雨が降り続くにつれて調理場は無惨な有様となった。湿気に加えて温度差による結露でタイル部分は濡れている。床にも水が溜まり、木のつつかけが滑る。配膳棚は毎日拭くのに、一日経てばまたカビが生えている。棚板に古い汚れが染みこんでいるのだろう。溝も匂っている。もし保健所の抜き打ち検査でもあれば、叱られること請け合い。もっとも「秀」の認証のあるレストランでゴキブリが走っていることがあるけれど。

しかし、よそのことを持ち出してもここがきれいになるわけではない。初めの頃は、週に一回は大掃除をやっていたが、最近は体調のよい時にしかない。ということはい長いことやっていないわけで、今日はどうしてもやらなければならぬ。目に付くカビが生えてくれたおかげで決心はつきやすいともいえる。

どうせ濡れているのだから、と壁や床をブラシでこすり、ホースで水をかけ、流す。調理台を囲んでコの字にある溝の上の蓋は鉄製で、腰を入れて気合いを入れないと持ち上げられない。これが六枚ある。重い蓋を開けるから、腰さんしっかりしてちょうだい。

はね返りの水に濡れながら、でもたいそうな決心の割には短時間の内に、カビもサビもホコリもヘドロもみんな水に流れた。私も汗と汚れをシャワーで流した。外もまだ雨が降っている。

○日

旧館をつぶして社宅を建てる。二軒作る、とK氏が言われた。これはよい知らせ。とにかくあのお化け屋敷がなくなるのなら言うことはない。入りこむ恐ろしい不良どもの戦いに疲れ果てたことがあった。消防署も防災上ない方がいいと言っていた。しかし待てよ。これまでのいろんなことから、たしかにつぶれたのを見るまでは喜んではいけないのだ。今までにこの旧館は何度取り壊されたはずか。でもまだ建っている。

疑っているうちに何回も業者がやって来て、計測や見積りをすると言うから、私は

どうぞどうぞと迎えた。お菓子でも出したい気分であった。

ある朝、一人の男が、黙って門の扉を開けて入り、玄関を入り、靴を脱いで上がり、私の部屋を開けて入って来た。私が出ると「ペンキ屋です」と言う。旧館の外側を見たいからウロウロさせてもらいたいとのこと。私は男がここまで入って来たことに腹が立ち「チャイムを鳴らしてください」と言った。男は「用がある時ですか、ウロウロするだけだから用はありません」とけろつとしている。私は「そうではなくて、来られた時に門の外でチャイムを鳴らしてくださいと言ってるんです」と言ったが、わかったのかどうか「すみません」と旧館の方へ行ってしまった。

私はK氏に電話をして状況を説明し、あんな調子で仕事に来られたのでは困る、と文句を言った。K氏がどこかの誰かと聞かれたので、〇〇工務店のペンキ屋と答えて切ったが、何で今頃ペンキ屋が来るのか、旧館を見なければならぬのか、おかしな話である。もしかして、ときよつとした。

どうやら旧館は、私には朽ち果てていると見えるが、取り壊さずにペンキでぼろを隠し、そのまま何かに使おうというつもりらしい。社宅が二軒建つのは、やはり幻であった。そうしたらあのペンキ屋にますます腹が立つてきた。よその家に黙って入りこんで座敷の襖を開けるようなものではないか。ウロウロする？ 言葉の使い方を知

らんのか。とにかく私はブルドーザーの来るのを待っているのだから、ペンキ屋なんかウロウロせんといってもらいたい。

○日

T子は外泊が多い上に、いるはずの当番の日にまた急に帰らなかつたりするので、三階の連中は怒っている。文句を言いたいのだけれど大先輩なので言いにくいというのもあるようだ。帰って来たら私から注意すると言ったら、寮長のO子が思いつめたような顔をして「私が言います。もしそれでだめだったら、おばさんにお願います」と言う。私にはそんなにむづかしいことではないと思われるけれど、O子達にとつては大決心がいることらしい。まあ、共同生活の中で無関心に過ごすより、何か事があれば自分達で考えるのもよいだろう。ついでに門限に関して罰則を厳しくすると言っていた。どういうことになるか、私は楽しみにしている。

○日

コロツケの日は人数が多いから食数を給食センターに言う時、冷凍にしてとつけ加える。言わなければ原材料が届くことになる。以前一寮の寮母さんが「必ず言いなさ

いよ、平等でないと寮生から文句が出るからね」と言い、言うたかと念押しまでしたけれど、私は時々逆らって四十個でも作っていた。いつからこうなってしまったのだろう。彼女がいなくなったというのに、自分から冷凍にしようと言っているのだ。いつか寮生にどちらがいいかと聞いた時に「どう違うのか判らへん」という答が返ってがっかりして以来か。とにかく手間は省けるから半製品を歓迎している。落ちぶれたものだ。

今日はRさんとクリームカニコロッケを作った。普段の手抜きの手抜きにはならないが、久しぶりの感触に嬉々としてやっていた。しかし次のコロッケの日はどうしようかとやっぱり考えている。

八月

○日

〇子が帰郷予定の三日前の夜遅く、おばあちゃん危篤の知らせが届いた。しかし〇子は「明日どうしてもしなければならぬ仕事があるからそれを済ませてから。飛行機がなければ電車で帰る」と言う。実家は愛媛県大洲市。

彼女の仕事熱心なのはいいけれど、おばあちゃんに会っておかないと悔いが残るのではないだろうか。みんなで明日帰るべきだと説得する。〇子もようやくその気になり上司に連絡をとろうとするが、これまた奥さんが帰郷中とてご帰館には至らず。「夜遊びならいいけど外泊やったらどうする？」などとさざめいているうちお帰りになつて電話がつながった。〇子はやらなければならなかった仕事について「わかります？」と上司に向かって失礼なことを言っている。上司は「君より古いのだ」と言ったらしい。それからいかにして早く帰るかの相談をする。とにかくまず空港に行つてキャンセル

ル待ちに一番乗りをする、二日後の切符があるのだから優先的に替えてもらう、カウ
ンターで「おばあちゃんに会いたい」と言つて泣く、それらがだめな時はすぐ新大
阪へ向かう、そのためには荷物は送り身軽で行く、などなど。O子はみんなの手助け
や励ましを受けて、夜明け前に出発した。

空港は二キロ南にあるが、普段は騒音は気にならない。しかしその日ははつきりと
爆音が聞こえて、その度にどうしたか、と気になる。飛行機がだめなら、新幹線、船、
在来線と乗り継いで行かねばならない。みんなも「乗れたでしょうかねえ」と言つて
いたが、九時頃O子から、松山に着いた、と連絡があつた。一番機に乗れたらしい。
しかし九十二歳のおばあちゃんはもう既に旅立たれたとのことであつた。

○日

みんな黒ン坊になりたがり、泳ぎに行けない子は屋上で焼いている。W子は泳ぎは
苦手で何年かぶりだと言いながらプールに出かけたが、すぐに真っ赤になつて帰つて
来た。私は見るなり言つた「そんな焼き方をしてエ、泣かんならんよ」。あくる日、
W子は目が小さくなるほどに顔が腫れ、口も動かせず、頭も痛いと言ふ。私は「もう
れっきとした火傷だからお医者さんに行きなさい」とすすめた。お医者さんは「今日は何

人目だ、無茶をするのが多くて困るな」と言われたそうだ。

W子は塗り薬と飲み薬をもらい一日寝ていたが、二日後に、お風呂に入ったらつるんとむけた、ときれいな顔を見せて私を驚かせた。若いからか、焼き加減がよかったのか全く奇跡に近い。三日前のあの無惨な顔はどこにもなくて、今泣いたカラスがもう笑ったように、W子は各部屋をのぞき「見て見て」と言っただけだった。

今は色素が定着していい色をしている。会社では「日焼けで欠勤したWさん」と評判だそうである。

○日

門限に関する寮会が開かれた。これは寮長達の発案である。すぐ、いつも遅くなるK子が「門限を十時半にしてください」と言う。門限は一応十時だけれど、電話をすれば十時半までは罰もないのだから同じことという理由である。私は「はじめにお嬢さんの帰る時間として十時までが適当というのがあるのだから、門限の時間を変えることはできない、変えるのなら罰の方でしょ」とK子の提案を退けた。

罰則を決めるのは寮生達だが、H子の「罰があれば、罰を受けさえすればいいのだ、という気がおきるから、罰はなしにして、必ず十時に帰ることにすればいい」という、

原点に帰る理想的な意見が出たりして、行きつ戻りつかなり紛糾する。

結局、十時を過ぎて十時半まではペナルティ1、その後十一時までは2とし、4コたまればトイレ掃除一回、十一時を過ぎたら即トイレ掃除二回と決まった。

門限破りの罰則のうち、十一時を過ぎた罰は、以前はお風呂洗いであった。しかし遅く帰った子にやらせたら、決まって手抜きである。注意すれば「しました」とうそをつく。私は二年以上もやっているのだから、どうなっておれば手抜きかよくわかっている。ごまかしは通らない。

C子はその一人で、手抜きでは罰にならないし、私はその度に文句を言うのは不愉快だからトイレ掃除へ追いやった。そうしたら他の寮生から文句が出た。「Cさんはトイレを洗わない、ゴミの袋を替えるだけ」と言うのだ。そこまで怠けるとは。また「真面目にやりなさいよ」と言わなければならぬ。T子、D子も同じく手抜きは得意だ。その前に門限破りの常連である。

つまりは、門限を破るのは一つの現象であって、他の事にもルーズで、根本的に人間の出来が悪い、ということだ。年齢には関係がない。

手を抜いて生きてどうなるのだろう。しかし、真面目な人が幸せかというと、そう

とも限らないみたいだし、そのところ、私にはよく判らない。

○日

ペルセウス座流星群が肉眼で見えるというので、昼寝をして夜に備える。この夜に限ってあいにくの空ではあつたけれど、私は座椅子とクツシヨンを持つて屋上に上がった。天頂は晴れてカシオペア座が見えた。街の灯を視野からはずせば私もあのおびただし数の星の中の一つになったような気がする。久しくこんな星を眺めたことはなかった。目的は達せられなくても、この美しい時があれば満足しようと思つていたら、大きな星が続けて三つ流れた。誰が流れ星の消えないうちに願い事をすれば叶えられると言つたのだろう。そんな暇はなかった。私が、アと言つているうちに星は流れて消えた。

九月

○日

連休のため寮生が半減したので気分は随分楽になる。食数が減ることもあるけれど、それよりも寮生一人一人の帰る時間、食事の有無などが、完全に把握できる安心感である。時間に流されて一日が終るのではなくて、こちらが時間を支配する余裕が生まれた。

やはり二十二入全部の行動を知るとはむづかしい。毎日部屋をのぞかない限り全員に会うことはなくて、時々「久しぶりに会うような気がするけど元気？」などと喋っている。

寮生達は、帰った時に門が開いていて、食事ができて、お風呂に入ることができたらそれでいいのかも知れない。そして干渉もされたくないだろう。私はそんな彼女達の気持ちは諒解しているけれど、それは別にしてそうドライにはなり切れない。いつ

も頭の片隅に引つかかっていたことが、人数が減ったら解決することが判った。やはりここでも許容量というものは存在する。その前に、私の能力の問題か。

○日

連休の一日、千里中央まで出かけた。以前十年余り住んでいた所だけれど、ビルが増え、様子もかなり変っていた。電車とバスを乗り継いだせいもあって、エトランゼ！という気分である。こんな近くでこんな気になれるのは、普段閉じこめられているおかげともいえる。それに今日は、結婚のため退寮する子への、寮からの贈り物を買うという、いわば公用であるから気も大きい。

お目当ての店で物色したが決めかねて、幸い、寮長のO子の勤務する店が近くにあるので呼び出した。O子は制服姿でやって来た。寮にいらるのは違う感じで頼りがいありそう。

公用を済ませてあとしばらく私用に時間をいただく。陶磁器を見て秋物の布地を買い、本も買ってコーヒーを飲んで帰る。三時間ほどであったけれど、余韻と、布を触っている時間を加えたら、長い間楽しめる外出となった。

○日

今日は庭師。涼しい風が吹くので、庭木の刈りこみ、草取りをする。雑草の方は、以前に除草剤をまいたので大したことはない。しかし、やぶからしには効かなくて、枯れ木が生き返ったかに見えるのはそれが覆っているからであった。

やぶからしの伸び方は気味が悪い。急速に触手を伸ばし迫って来て、捕まって食われそうな気がする。そう思いながらここまでではびこらせてしまったのは、体が言うことをきかなかつたからだ。健康診断の結果も悪く再検査となった。しかし「いよいよ私もあかんのか」と思いながら受けに行ったら異常はなくて、とたんに庭の手入れなぞしようという気になるのだから現金なものである。

それで、いざにつつきやぶからしを一網打尽に、と取りついたら、蝶の餌場になっている所があつて氣勢をそがれる。蝶は好きだから幼虫も殺せない。幼虫が蝶になるまで、やぶからしの一部は延命となった。

高い塀に囲まれた庭の中にいたら、昔読んだ『秘密の花園』（バーネット作）を思い出した。母親が亡くなつたために閉ざされた花園を老庭師が密かに育てていて、それを見つけた少年が寝たきりの子を案内し、自然に触れて回復するが、すっかり元気になるまで病人のふりをして、突然に父親を驚かせるというお話である。私が花園を

こしらえたところで、単なる秘密のというだけでドラマチックにはなり得ないのだけれど、それを読んで感動した時を思い出し、和やかな気分になった。

○日

どうやら各部屋にダニ、南京虫がいるらしい。南京虫はまさかと思っていた。かみ口が二つ並んでいいるから、寮生達と「夫婦でかむのやるか」「お友達じゃない」と言っていたのだけれど、調べたらやはり南京虫の特徴であった。

毎年、ゴキブリとその他の虫に対して二回薬剤をまきに来て、その度に「片付けて、布団を出して」とめんどくさかったが、今年はゴキブリしか来なかった。ゴキブリはいないのだし、他の虫用のもの、形式的なもののような気がしていた。しかし、こうなると来なかったからてきめんといえるわけである。遅まきながら来てもらうように頼んだ。私はそうと判れば待てなくて、畳を上げて干し、殺虫剤をまいた。押し入れの中も乾かした。

それにしても、ダニばかりでなく蚊にしても律儀過ぎるではないか。私には彼らの子孫を養うほどの血液なら、無条件で提供してやってもよい気はあるのに、彼（彼女？）らは忘れずに日もちのするおみやげを置いて行く。あの律儀さはいただけない。

十月

○日

ようやく涼しくなり扇風機を片付けたところなのに、もうこたつがほしくなる。日も短くなってあわただしい。思えば去年の夏は日の長いのを幸い、時々夕方、ボイラーに火を入れるまでの間に自転車で一走り、Rさんの家を急襲、驚かしてはトンボ帰りをしていった。ジョギング代わりと息抜きに絶好であった。今年も日が長くなったらしようと楽しみにしていたはずなのに、その気の起ころぬうちに過ぎてしまっていた。

寮母日記を書くのはひと月のけじめとなるし、生活の記録が残り、怠け者の私にとってはよいことである。しかしここ数日、夕食の下ごしらえをしておいて、さあ書きましょう、と文章を考えていたら眠くなり、目が覚めたら仕事が続いて書く時間がない、というのが続いた。

頭よ、変な条件反射を起こさないでよ。でも昼寝をしたら夜もよく眠れて、夏バテの残りが解消、体の調子がよくなってきた。これも寮母日記のおかげといえる。

書く場所を与えられる、報酬付きの仕事がある、のはかつて「ものを言わずにただ働いていたらええんや」と便利道具扱いされていたから、よけい身にしみて有難く感じられるのだ。

私に与えられた仕事があるということを、なぜかボイラーに火を入れる時に強く思い、機械室の壁でヤモリが蛾を追ってるのを見て「あなたの仕事はそれ、私の仕事はこれ」と感動したことがある。なんでそこで感動か、なんでヤモリなのか、と今考えるところとおかしいけれど、今日も夕焼けの残る広い空の下で、仕事に感謝し、また小っちゃな幸せでも満足している自分をいとしいと思いつつ、ボイラーに火を入れた。

○日

玄関の二枚の開き戸とその両横の部分に、以前は素通しのガラスが入っていた。中庭を隔ててある門は鉄柵であるから、道から中が丸見え、玄関ホールにある三台の電話を使う寮生が床に座りこんでいるのも、夜はよけいにはつきりと見えた。そのせいか男達が外であやしげなる行為に及んだりして、私の頭痛の種であった。

K氏に、ステンドグラス様のステッカーを貼るか、紙を貼りたいと言ったら、ガラスを替えましようと言われ、模様入りのすりガラスに替えてもらえた。

仕切りがはつきりしたら、不思議にホールが広く感じられ、もちろん、外から見えないから落ち着き、寮生も安心して？お行儀悪くしてられる。

もう一つ不思議なのは、ガラスが替わってから、外の音が聞こえにくくなったことである。ゴミ収集も、郵便屋も知らぬままに行ってしまう。

これは心理的なものか、ガラスの模様で音波が屈折して弱まり、私の耳に届かなくなったのか（耳はまだよく聞こえる）音響学の専門家に聞きたいと思っている。

○日

三回目の栗ご飯。例によって寮生に、栗むきを手伝って、と書いて食堂に置いた。終る頃に見に行ったら、Y子とO子が「残ってるの全部むきます」と私の分までやってくれた。

むきながら二人の話。Y子「公立大学が二校受けられたなら、私は絶対、大学に行っていたわ」O子「大学に行くより、こんな栗むきが上手になる方がええよ。大学に行ったら人と話しても、私らとちっとも変らへん」。

私はO子の意見に、全面的に賛成とは言えないが、この寮に来た大学卒業生に限っては、四年間も大学で何をしてきたのか、と思わざるを得ない。人間的成長が認められなくて、年とった分、横着である。

今年の受験生も、朝食は自分で用意するように言ったのにしてなくて、私がトーストとコーヒーをサービスしたが、お皿、カップをそのまま返して来た。水洗いくらいしたらどうやるか。私が試験官なら落とす。一事が万事という気がするから。しかし強力なコネがあるのか、入社し、入寮する口ぶりであった。でももう、しつけをし直そうというファイトもわいてこない。

M子が「私、今年は上手にむけました。段々上手になります」と笑っていた。最初の年は、あまりの危なっかしさに「やめて」と言ったのだった。

むかれた栗は、渋皮の残っているのもあったけれど、私はむき直しはやめて、みんなのやり方を尊重してそのまま炊いた。

○日

私の部屋が、にわかには華やかになった。何もなかった部屋に、去年退寮したI子が博多人形を置いてくれたけれど、それ以上自分からは積極的に飾る気はなかった。

しかし最近、ヨーロッパの有名窯のコーヒーカップを手に入れたら、台所の戸棚にしまふ気にはなれなくて、コーヒーをいれてそれで飲んだ後、置物代わりに部屋に置き、他のも一緒に並べた。花もいるなあ鉢植えも置いたら、たちまち様子が変わってしまった。

気に入ったものを、使わない時にも見ているのはいいものである。心の中も華やかになる。

母が食器に贅沢をする人で、昔からいつも食卓の上だけが、暮らしにそぐわない豪華なものであった。後で聞けば祖母の実家が瀬戸の窯元であったとのことで、母は小さい時に植え付けられたものが抜けなかったのだろう。私も知らないうちに陶磁器が好きになり、中でも高温で焼かれた、ピンとした磁器の肌にひかれる。描かれた絵は、見知らぬ国の絵付師の、息をつめながらの筆運びが感じられて、会って苦勞をねぎらいたいような気にもなる。私はそれを布に写し、刺繍でなぞって、お揃いのナプキンを作ることをもくろんでいる。

十一月

この前、寮母日記が書いて有難い、と言ったばかりなのに、書けない。寮生のことを書こうと思ったら、出てくるのは文句ばかり。それを書けばよいのだろうけれど、何とも気分が悪くて、つい視線をはずした所で物を言うことになる。一度、文句特集をして、えげつなくののしってやるのもええなあ、とは思っているけれど。

宮沢賢治にもっと近寄りたくなり、花巻まで行くことにした。二日続きの休みをとるために、四十日間休みなしである。働きづめだった賢治のことを思えば楽なものであるが、神経は疲れる。ひたすら、後にやって来る快樂(?)を思い浮かべることで慰めごまかしている。

思えば賢治とのつき合いは四十年以上になる。戦時中の夏休み、兄と二人で石川県の父の実家へ行った時に、兄の持っていた沢山の本の中に「雨ニモマケズ」の本があった。田舎での、祖母について行って手伝った畑仕事や、従兄に教えてもらった魚とり

や、稲こき見学などの体験は面白かった上に、賢治の生活も実感として理解できたのだろう。「雨ニモマケズ」はいつの間にか私の物になった。

その後、賢治の死後二十年に、私は新聞社にいたので、命日に賢治のことを書いて中学生新聞に載せてもらった。あれが原稿料をもらった最初であった。それからしばらくして、花巻を旅した友人から賢治の歌の軸をもらったが、銘もないし、どういうものかよく判らないままに持っていた。ところが最近、賢治が死ぬ前の日に詠んだ辞世の短歌二首のうちの一首、つまり絶筆となったものの複製と判った。賢治にも、下さった人にも、知らなくてごめんさい、という思いである。これで私は賢治が好きで、よく読んでいるとは言えない。軸を吊り、その前に花を置いた。

花巻は大阪から一〇五六・四キロ東北の地。寒いだろうし、賢治に敬意を表してコートを新調することにした。といっても、持ち合わせの布を使い、自分で縫うのである。

しかし、やりかけた矢先に歯の具合が悪くなって頓挫。ちゃんとかぶさっている歯が気持ち悪く、舌に触るものがあるので診てもらったら、奇形歯で、普通の内側に引っ付いている小さな歯があつて、歯茎が痩せたために出てきたのだろう、ということであつた。

邪魔になるし、動いているので取ることになったが、普段、風邪薬でも何でも半分

で効く私が、麻酔が効かず二回も打って、取るのにも時間がかかり、薬が切れたら痛くて弱ってしまった。

歯医者とも四十年のつき合いで、小さい頃から、歯が折れたり欠けたり。先天的に弱いらしく、近い将来、総入れ歯になるのは必至。四つ違いの姉は今でもきれいに揃っている。姪が小学生の時、親子で歯のコンクールに入賞したという、姉妹でこの両極端はどういうことか。

とにかく、宮沢賢治と、歯と、縫いかけのコートのごちやませの中で日が経っている。

十二月

三年目

花巻から帰って、もう三週間が経つというのに、私はまだ浸りこんでいる。一週間は酔ったまま「おばさん業」も上の空、旅行支度を解きもせず。ようやく、もってきたパンフレット類を出して鞆と頭の中を整理、フィルムの現像、焼き付け、引き伸ばしをしてアルバムを作り、メモを文章に直してワープロで打っていたら三週間が経っていた。それでもまだ思い出すこともあり、全部終わっていない。花巻から送ってもらった林檎をかじりながら、宮沢賢治の童話を読み返したり、高村光太郎のも改めて読んだ。

「おばさん」の合間々々に、心は花巻に戻って私は忙しい。多分、この余韻はまだ続く。

一月

○日

よそでも、寮生の中にも年末年始九連休の人があったけれど、私は無休である。寮生は一斉に休みになるのではなく、勤務地によって違い、三十一日まで働いて一日の朝に帰郷する子もいる。そして早くに帰った子は、もう二日には戻って来るので寮を空けることはできない。

でもその中で三十日は食事もお風呂もなしで、残っている四、五人の寮生はみんな遅く帰るので私は夕方から抜け出して「第九」を聴きに行った。

これが私のお正月。でも外へ出つけない私は、十二月の末は寒いもの、とコートを着て行ったら、大阪は汗をかくほどの暖かさで、みんなジャケット姿。山猿がたまに都会に出るとこんなもんだ。

暦通りのお正月は掃除に費やし、誰もいない夜もなんとはなしに過ぎてしまった。

去年、おとしは、まるでやまあらしのように体を硬くし、体中の神経を立てて時の過ぎるのを待っていたのだが、今年は慣れもあるけれど、どうやら感情が沈滞しているらしい。年末の「第九」もそんなに感激せず、終った後友人達とお茶を飲んでしゃべってもつまらなくて早めに帰ったし、人の体は時として、嬉しさも淋しさも体の中まで浸透しない状態があるのかも知れない。

でもやっぱり、プラスもマイナスもある、振幅の大きい方が、生きている実感があってよいような気がする。

○日

最近欠食者が少ない。食べる人数は普段の五割増しで、その分調理の時間は長引く。寮生はお正月にお金を使い果たしたか、毎月の給料日前の状態と似ている。もっとも給料が入った直後でも、メニューによつてはほぼ全員食することがあるけれど。

若い娘達の好きなものは、第一に卵を使ったものなら何でも。それから、炊きこみご飯、お寿司、鰻丼などのご飯もの。次は、コロツケ、ハンバーグ、カツレツ類。魚もフライ、ムニエルであれば食数は多い。煮物となると半減する。煮物そのものが手間がかからないし、少なくなるのだから私は楽だ。

だから、私の方から言うと「手間のかかるものが好きなんやね」ということになる。だし巻きの時など、卵を四十個も割れば、もうボウルの中をのぞいただけで「！」ものである。それを巻き焼くのに、私は雑念を払い、ただひたすら「油をひいて、といた卵を入れ、巻く」を繰り返す。これはもう行のようなもので、しかしその後には満足感や快感があるから、ひよつとしてお料理も宗教の世界に入るのではないか、などと思ったりする。

ただし一つだけ例外があつて、オムレツを焼く時は鼻歌まじりでやっている。フレッチオムレツだけれど、これは百個でも焼けそう。多分、どうやっても出来損ないにはならないからだろう。

失業したら、オムレツ屋を開こう。

○日

寮生の朝寝坊続出。

C子がダダッと走り下りて来て「遅刻、遅刻、タクシーあるかなあ」と騒がしく出て行ったあと、M子から「Yさんが来ませんが出ましたか」と電話がかかった。M子とY子は同じ店で、早番と遅番になっていた。メモ板を見たらY子は外出になっていた

ない。部屋に行くときY子は熟睡中。揺り起こして「今日は休みじゃないのでしょ」と言うと「出勤します。遅番です」とゆうゆうとしている。「遅番でももう着いている時間よ」と言ったらガバとはね起きて「うわーどないしょ、ごめん」ごめんと私に言われてもどうしようもない。「はよ行きなさい」Y子は支度もそこそことんで行った。

次はW子。この時は私が会社へことづける伝票が残っていたのですがすぐわかった。部屋に行つて「Wさん、ご出勤のお時間が過ぎておるようですが病氣ですか」と言つてやつたら、目覚まし時計をつかみ目に近づけて「おばさん、これほんと？ この時間ほんと？ 病氣と違います。行きます。え、なんで？」とろろろしている。しかし出かける時はお化粧はしっかりしてあり、落ち着いたものであった。あんまり急いで信号無視などしなけりゃよいかと心配だし、お化粧なんか放つといふ急いだらどうやらか、と思う。

お正月、ゴールデンウィーク、お盆などの長い休みの後は、体調を崩す子が多かった。今度は珍しくないなあと思つていたら、こんな形で表われた。普段でも夜遅くまで騒いでいて朝よく起きられる、と七時間は眠りたい私は感心していたが、時には若さも睡魔には勝てないらしい。

○日

かねてより私の念願であった、お化け屋敷のような旧館を取り壊すことは果たされず、そのまま中を改造して何軒かの社宅にすることになった。人が住むのだから、無断侵入や火災の心配はなくなつて、私の気は楽になるし、草取りや落葉掃きから解放されるけれど、私の運動場の夢も一緒に消えた。

しかし、築後五十五年経つていて、壊すしかないと思えた旧館が、日に日に新築のように変形するのにはびっくりする。当たり前のことだろうけれど、やり方はあるものだ、と毎日眺めている。一寮は既に三軒の社宅となり、引越しの挨拶に來られた。今年が最後だから、旧館の庭に水仙が咲いたら、全部切つて来ようと思つている。来年からは、その水仙も、社宅の人の目を楽しませることだろう。